

# 「学びという旅」をめぐって—旅の仲間とその思い出—

古澤 有峰

宗教学年報別冊の留学体験記に、私の留学について執筆して欲しいという依頼があった。いい機会なので、今まで別冊に書かれた留学体験記を幾つか読んでみた。そこで改めてわかったことは、十人いれば十通りの留学体験記がありうる、ということである。今までの数多くの留学体験記の中に、また新たに私の「留学体験記」を加える意義は、あえて言うならその点にあるのかも知れない。要は、誰のどのような経験も、それは唯一無二のものであるという事だ。それでも人はそこから何らかの共感の種を見つけだす。私自身もそうだったように思う。ただ、この種の芽が出るのにどのくらいの時間がかかるのか、またどんな芽が出るのかは、人によって随分違うようだ。

そもそも、ここでいわれる「留学」とは、何を意味するものであろうか。広辞苑で調べてみると、よその土地、特に外国に在留して勉強すること、とある。一般に「留学」と言った場合、それはほとんどの人達が「海外」のことをイメージするであろうということを重々承知の上で、つまり、それは必ずしも海外であることを意味しないのだ。実はこれは、私にとっては最も納得のいく実感レベルでの「留学」の定義である。私にとっては、国内で研究の為に移動することも、また海外に学びに行くことも、同じ「学びの旅」の一行程であった。より良い学びを続けるチャンスを得るために、よその土地へ移動した、ただそれだけのことである。それは今も以前も変わらない。

そうはいっても、確かに海外に行くと、だからこそ学んだということは多くあった。それははっきり言える。国内での移動よりも、やはりプラスアルファのタフさが要求されるのも事実である。しかし人の情けはどこでも同じ、と思う。私が最初に留学したのは、今からもう10年ほど前、ヨー

ロッパ、スイスのドイツ語圏であった。手にした住所を頼りに迷いに迷った末、ようやくたどり着いた寮はシシカバプーの匂いが立ち込め、管理人さん達は皆トルコ系だった。彼らは私のドイツ語と英語の混ざった身振り手振りでの、そこにたどり着く前に私が被ったアクシデントの数々についての説明に、親身に耳を傾けてくれた。そしてなまりの強いドイツ語で、私と同じ奨学金で数日前にスイスに来たというハンガリーからの留学生を呼んでくれた。10月下旬のスイスは既に真冬の寒さである。彼らは事情を聞くと、あんたそりゃひどい目にあっただね、まずはちょっとこれを食べて元気出なさい、と熱々のシシカバプーをご馳走してくれた。そうして私は生まれて初めてのシシカバプーを、ふうふう言って鼻をすすりながら食べることとなった。だから私のスイスでの最初の思い出は、チョコレートでもスイスチーズでもなく、いつもシシカバプーの匂いと一緒である。

そこで知り合ったスイスでの最初の友人達の記憶は、今でもはっきりと残っている。ハンガリーから来たその女子学生は、路面電車の乗り方からスーパーでの買い物の仕方まで（システムが違うので最初はずいぶん戸惑ったものだった）クールにかつ親身に教えてくれた。先にスイスに来ていた彼女の友人達にも紹介してくれた。皆、スイスと母国との経済格差のため苦しい留学生活をしており、住み込みのベビーシッターをしているような人もいた。東欧から来ている彼女達が色々差別にあっている現場にも居合わせた。私はヨーロッパでは見た目から既に異邦人なので、最初から対「異邦人」モードの可もなく不可もない対応をされて、それはそれで納得がいったのだが、彼女達が喋ると、つまりアクセントなどでスラブ系の留学生だとわかると、あからさまに態度を変える人

達も結構いた。スイスは一般にそのようなことが少ないと聞いていたので、それを例えば大学の教務係で見たりした時は、結構ショックだった記憶がある。

到着して1週間目、それが私の誕生日だと知った彼女達は、そんな大変な留学生活の中、お金を出し合って私の誕生日パーティーをしてくれた。本当にささやかな手作りのパーティーだったが、初めての海外でひとり誕生日を迎えるのは心細いだろう、と彼女達が考えてくれたものだった。その時に貰ったねずみの縫いぐるみは今でも大切に家においてある。彼女達はその縫いぐるみにつけてくれた名前（だと長らく思っていた）は「チンチョコギ」と言ったが、それが唯一私の知っているハンガリー語となった。後でハンガリー語のわかる友人に聞いてわかったのだが、チンチョコギとは、ハンガリー語で「ねずみ」という意味だった。

彼女達は本当に逞しく、また実際すごく優秀で、奨学金を得て勉強を続け、足りない分はとにかくいろいろな事をして食いつなぎ、家族の為にも、また自分の夢を実現する為にも、世界中どこに行っても何としてでもやって見せる、と言っていた。実際その後、スイスに半年ただけで、アメリカ人のパートナーを見つけてアメリカに移って行ったツワモノもいたので、当時の私は本当に彼女達のタフさには恐れ入ったものだった。それでもどんな状況でも仲間や家族を大切にしている彼女達から、私は色々なことを学んだように思う。

しかし、まるでジーナ・デービスのような体格（180センチを超える身長でグラマーなブロンドやブルネット）の彼女達に「ハンガリー人の祖先はアジア人と親戚なのよ」と言われて大変な親近感を示されると、うーんと唸ってしまった記憶がある。フィンランド人の友人にも同じ事を言われたが、彼女達にそんなことを言われても、正直実感が湧かずに苦笑いするしかなかった。それでも世界中、それが例え見知らぬ土地であったとしても、また最初にどんなひどい目に遭っても、必ずそこで友人は出来るのだという確信を、彼女達との出会いが与えてくれたように思う。勉強出来る事の幸せに感謝する気持ちや、未知のことがらに向かっていくガッツも、こういった中から共感と

共に生まれた。そう、健康でそして生きてさえいれば、次の日の朝は清々しい気持ちと共に、必ずどこでもやってくるのである。

その後のほぼ7年間を、研究や調査もかねて年に1、2回のヨーロッパとの往復に費やした。一度の滞在でおおよそ1ヶ月から3ヶ月は費やしていたように記憶している。特にクリスマスシーズンには、あらゆる宗派の友人にくつついて、というよりも、私が特定の信仰を持っていないということ、皆我先にと誘い出してくれたというのが正解なのだが、チューリッヒ市内のほとんど全ての宗派の教会のミサやイベント（スイスドイツ語・ドイツ語・フランス語・英語などで、市民のニーズに合わせて幅広く行われていた）を“はしご”した記憶がある。御存じの通り、歴史的に見てチューリッヒは宗教改革の嵐が吹き荒れたところでもある。あの時はまだ宗教学は学んでいなかったが、現在の研究の萌芽が既にその時に見られたという事かもしれない。余り商業化されていない伝統的なスイスのクリスマスも満喫出来、あれは本当に有意義な経験だったし、連れていってくれた友人達に今も感謝している。サイエントロジーが問題になっている等という話も、初めて聞いたのはチューリッヒだったし、初めて座禅の仕方を教えてもらったのもスイス人のお坊さんのところだった。チューリッヒには、また研究調査の為にいつか戻るかも知れない、という予感をいつも持っている。

いずれにしても、そのままいけばドイツ語で博士論文を、という可能性まで出て来ていた。最初の不運な出会いとは異なり、その後私はどんどんスイスが好きになったし、良きスイス人の友人も増え、私の心の中ではスイスは第2の故郷と言える程の存在になっていた。それが何故、その後のアメリカへの留学へとつながったのかと、ここで一言で説明するのは難しい。特にスイス政府奨学金とアメリカのフルブライト奨学金が同時に来てしまった時、どちらかを選択しなくてはならなかった、私のその時の混乱と迷いについてはご想像にお任せするしかない。身内や私自身の健康上のアクシデントも重なり、私のアメリカ留学は、日程的に本当にぎりぎりの、体力の回復に最低限

必要とされた手術後3ヶ月目によく“強行”された。留学の前後に色々な事が起きるといえるのは、どうも私に限らずよく聞く話のようでもある。V・ターナー的な見方をすれば、人生の節目節目の時には色々な事が起こりやすいということかもしれない。

いずれにしても、それ以前は観光を含めてさえも、英語圏に行った事が一度もなかった。今思えばよく決心したものだと思う。しかし要約して言えば、あの時ハンガリーから来た彼女達が言っていた言葉と同じ、つまり Now, it is the time to move on, ということだったのだろう、と今は思える。実際、これは私の研究の進展や、私の人生の変化と呼応して生じたものであると言えよう。しかし、そのようにして術後ぼろぼろの状態で行ったのがハワイだったという事も、今考えると私には本当にラッキーなことだったように思える。

実際、アジア・太平洋地域からの人達があんなに沢山いる留学先は私にとっては初めての体験で、ここでまた多くを学ぶ事が出来た。スイスでは、私はいつもアジア人として一人、というような状況の中にいたので、この事は実は一番のインパクトを私に与えた。私の故郷は日本海側で、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、台湾等の出身またはゆかりの方々沢山いる場所である。私の友人達にもそういった人達が多かったので、だから英米圏とはまた違う外国を身の周りにいつも感じていた。しかしながらハワイはやはりアメリカの一部でもあり、また太平洋地域の影響を色濃く受けているので、そこでの経験は、私にとっては外国といってもまた違う文脈のものであったと考えられる。

例えばハワイのサンタは、真っ赤なアロハシャツを着てウクレレで歌を歌いながら、トナカイと一緒にカヌーに乗って海からやって来る（ということになっている）。またピースサインならぬ、ハワイ独特のシャカというサインをしながら、サーフボードに乗ってやって来るサンタもいる（ということになっている）。クリスマスにはそこかしこのお店でクリスマス・バージョンのハワイアンが流れ、また病院等で行われる慈善クリスマス・パーティーでは、皆が自慢のフラを披露し合う。あまりの陽気で楽しいクリスマスのイメージに、

最初は面喰らっていた私も、そんなハワイがすっかり気に入ってしまった。

また、日本ともゆかりのあるハワイで、あのようによく日本のことをよく理解した素晴らしいアメリカの研究者の下で学ぶという機会は、私に想像以上の様々な出会いをもたらしてくれた。また冬の寒いポストンやサンフランシスコに行った時は、手術後の最初の海外での冬をハワイで過ごせた事に本当に感謝したものだ。こうした偶然が重なって、ハワイの温暖な気候と（観光用の宣伝とはまったく違う文脈での）「癒しの島」としてのあり方について、私は身を持って体験する事が出来たように思う。

同時テロの時にもそれを痛感した。ハワイには軍の基地があるので、警戒度は本当に高まったが、異なる文化や宗教の人達へのいたわりや配慮の気持も、同時に高まっていくのが良くわかった。その後学会その他でアメリカ本土とハワイの間をよく往復したが、その度にそこに住む友人達との話、また実際に見聞きする事を通して、アメリカ本土とのハワイの反応の違いを痛感したものである。ハワイにはハワイの現実があり、私はある種の楽園幻想をハワイに求める事を決してしない立場にある。しかしハワイにいと、人の心のある部分がまるやかになるのも事実のように思う。あの土地自体が、歴史的に色々な痛みを知っているということも一つの理由であろう。いずれにしても私はもともと観光地としてのハワイに興味がなく、前もってそういった情報や先入観がまったくないままに行ったのも幸いしたようだ。アメリカ、そしてハワイとの付き合いは、今後も長く続いていく事だろう。

海外に行く事は、現代に至ってはそれほど珍しいものではなくなくなってきている。そこでの留学の意味は、もちろん夏目漱石や森鷗外が留学した頃とは、大きく変わってきている事も自明の事ではある。しかしそれと同時に、どんなに時代が変わっても「学びという旅」を巡っては、おそらく不変の部分が存在する。どの人も、その人それぞれのオリジナルの「学びという旅」の軌跡を持つのである。

私にとってはこのスイスとハワイ（またはヨー

ロッパとアメリカ) という異なる2地域への留学が、その後の私の「学びという旅」の軌跡を確かなものにしたのは事実だ。またそのことが、自分自身のアイデンティティを再認識する事にもつながった。現在私は、このような今までの「学びの旅」の中から学んだことを、博士論文の中に十二分に生かせたらと考えている。それが出来れば、私はまたさらなる次の「学びの旅」へと進むことが出来るのであろう。こうして旅は続いていくのだ。

今回この執筆を引き受けた理由の一つは、ささやかではあっても、このような軌跡の一つを記述し残すことによって、今後このような「学びの旅」に出ようという人達の、何らかの参考になればという願いがあったからである。私自身、そのような先輩方の軌跡から様々な事を学びつつ、私自身

の軌跡の参考にしてきたところがあるし、今もそれは続いている。それでも、最初に述べたように、私達はそれぞれ唯一無二の、オリジナルな軌跡を描いていくのであり、私自身もまたその旅の途中である。

それはおそらく旅行と似て、どんなに様々な旅行記を読んでも、結局私達は私達のオリジナルの旅に行くしかないのと同じである。それでも旅には同伴者がいることもあるだろうし、また遠く旅をする仲間からの便りを旅先で読んだりすれば、旅の楽しみはまた一層増すことだろう。何か辛かった時には、その便りが励みになる事もあるかもしれない。こうして私達は様々な「旅の仲間」を得ていくのであり、それがこの「学びという旅」の一つの醍醐味なのではないかと、私はいつも考えている。